

# 17 動機づけ以外の個人差要因

言語学習に動機づけ (motivation) が重要なのは既述の通りである（「16 学習者の動機づけ」の項を参照）。本項では、それ以外の個人差要因について最新の知見を踏まえて概説する。

## ● 性格 (personality)

性格からの影響を考察した研究の多くは、Myers (1962) や Eysenck and Eysenck (1964) による心理学的知見を用いて性格を分類、測定し、言語習得との関係性を検証している。近年、心理学でよく用いられるのは性格の **5 因子モデル** (five-factor model) だが (Costa & McCrae, 1992)，言語学習と性格の関係についてこのモデルを用いた知見は少なく、さらなる研究が望まれる。

また心理学では、言語学習に応用可能な知見が他にも生まれている。例えば、Csikszentmihalyi (1997) の言う **自己目的的な性格** (autotelic personality) を持つ場合、特定の活動の遂行自体を目的とする傾向が強く、言語学習の遂行自体に価値を見出せる学習者であれば、習得にもつながりやすいだろう。また、一般的に言語習得には長期間を要するため、長期的な粘り強さと情熱を概念化した **やり抜く力** (grit) も注目すべき特性と言える (Duckworth, Peterson, Matthews, & Kelly, 2007)。

## ● 学習スタイル (learning styles)

学び方の好みは学習者によって異なるが、それを説明するのが学習スタイルという概念である。これまで教育学や心理学で盛んに研究されてきたが、概念としての説明が難しく、多数の理論が乱立している状態である。

言語学習に関する学習スタイルも実に多様な側面を持つ (Cohen, Oxford, & Chi, 2001; Ehrman & Leaver, 2003; Oxford, 1999; Reid, 1995)。ここでは、いくつか例を挙げる。まず、情報入力に関する視覚、聴覚の好みである。前者は教科書を読む、後者は講義を聞くことで理解がより進むかもしれない。次に、直感的でランダムか、具体的で整然かという違いである。前者は曖昧な内容を想像力豊かに吸収できる一方、後者は事実の順序立てた理解に能力を発揮するだろう。また、帰納的か演繹的かも興味深い。前者は個々の事例や経験を、後者は一般的な概念や規則を取り口にすると理解が進みやすいはずだ。

学習スタイルは変わりにくいとも言われるが、訓練による変化向上も期待でき

る (Cohen, 2010)。よって、学習者にレッテルを貼るためではなく、必要に応じて不得手な学習にも向き合えるように使われるべき概念だと言える。

### ● 言語不安 (language anxiety)

言語学習に関する不安も注目度の高い個人差要因であり、不安の原因や影響力等について様々な考察が行われてきた (MacIntyre, 2017)。ここでは、今後の研究に対して重要な視点を 2 つ紹介する。

第 1 に、**抑制不安 (debilitating anxiety)** と**促進不安 (facilitating anxiety)** の区別である。前者は英語学習や習得に否定的な影響を、後者は肯定的な影響を与える。これまで前著に関する研究が多く、不安を取り除くための実践も多かったが (e.g., Young, 1999)，近年では後者も着目されるようになっており (e.g., Dewaele & MacIntyre, 2014)，さらなる検証が必要である。

第 2 に、**複雑系 (complex systems)** に基づく視点の導入である。複雑系では、不安は、目標言語能力、学習環境、周囲の人物等の多様な要因と相互作用し、時系列の中で絶えず変化する感情として捉えられており (MacIntyre, 2017)，縦断的研究における詳細な記述が求められる。

### ● 言語学習方略 (language learning strategies)

言語学習方略という概念は、いわゆる英語の学び方に相当する。「何をすれば学習に成功するか」という視点から、長年注目を集めてきた。初期には、成功事例の特徴を分析する研究が多く見られた (e.g., Rubin, 1975; Rubin & Thompson, 1982)。例えば Rubin (1975) は、学習成功者の特徴として、実際のコミュニケーションから学ぶ、誤りを恐れない等の 7 項目を見出している。

1990 年代には、心理学等の理論を援用して学習方略が分類されるようになった (O'Malley & Chamot, 1990; Oxford, 1990)。例えば Oxford (1990) は、学習方略を直接方略としての記憶、認知、補償方略、間接方略としてのメタ認知、感情、社会方略に分類し、これに基づいた測定尺度も作成している。

近年では、文脈や**自己調整 (self-regulation)** といった側面が重視されている (Griffiths, 2018; Oxford, Lavine, & Amerstorfer, 2018)。前者は複雑系と関連しており、学習方略だけを独立して考察するのではなく、特定の文脈や環境の中に位置づけてその在り方や変化を詳述するという考え方である。後者は**自律 (autonomy)** とも関連が深く、学習目標に向けて必要な学習方略を効率的に選択、実行していくプロセスに焦点を当てている。

(安田 利典)